

文化遺産国際協力コンソーシアム 協力相手国調査(モンゴル)

ヘンティ県遺跡状況調査 報告書



はじめに

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、我が国の文化遺産国際協力を推進するための様々な情報収集を行っており、平成19年度は、協力相手国の状況調査として、モンゴル国での文化遺産保護に関する総合的な聞き取り調査を実施した。この調査を進める中で、モンゴル教育・文化・科学省文化芸術局より、同国の文化財のなかで最も重要なものとしてリストに記載されている3つの文化遺産の整備に係る協力要請をうけた。

これらの文化遺産は2007年に制定されたモンゴル国の国家計画において、2009年より保存修復並びに整備活用のための事業を行う旨明記されているものの、モンゴル国内で保存修復にあたる人材や技術が不足していることから、我が国へ支援を要請したものである。

これをうけ、文化遺産国際協力コンソーシアムでは、東アジア・中央アジア分科会ならびにモンゴル研究者による専門家会議で日本としての協力の在り方について議論を重ね、その結果、2008年9月に、支援要請を受けた遺産の中の2カ所であるアラシャーン・ハダ遺跡とセルベン・ハールガ遺跡へ事前調査団を派遣する運びとなった。調査団は、遺跡の概要や保存状況、今後の調査研究ならびに保存修復・活用計画策定のための基礎情報の収集を行った。本書は、この調査の成果をとりまとめたものである。

本書が、今後の我が国の文化遺産国際協力推進ならびにモンゴル国の文化遺産保全への一助となれば幸いである。

はじめに	1
目次	2
I. 調査の背景と概要	5
1. 調査の目的	7
2. 調査メンバー	8
3. 調査期間、日程	9
II. 遺跡の概要と既往研究	11
1. アラシャーン・ハダ遺跡	13
・遺跡の概要・学術的な位置づけ	13
・モンゴル国内での文化財としての位置づけと保存修復計画	14
・遠景からの写真・位置図	15
2. セルベン・ハールガ遺跡	17
・遺跡の概要・学術的な位置づけ	17
・文化財としての位置づけ（保護制度上の位置づけ）	18
・遠景からの写真・位置図	19
3. エルデネ・オール遺跡	21
・遺跡の概要・学術的な位置づけ	21
・文化財としての位置づけ（保護制度上の位置づけ）	21
・遠景からの写真・位置図	22
III. 遺跡の現況	23
1. アラシャーン・ハダ遺跡	24
01. サイの岩画	24
02. 契丹文字銘文	26
03. タムガのある石盤	28
04a. アラシャーン・ハダ（大岩）東面	31
04b. アラシャーン・ハダ（大岩）南面	40
05. 人物画	42
06. モンゴル文字銘文	44
07a. タムガのある横たわった岩	46
07b. チベット文字銘文	48
08a. 石器時代の遺跡	50

08b. 岩上の記号	52
09. 眉型の岩	54
10. ウマの岩画	56
11. 野生ヤギの岩画	58
12. クマの足跡岩	60
13. 頂上部にあるオボ	62
14. 岩の上の岩画	64
2. セルベン・ハールガ遺跡	66
01. 女真文字	66
02. 漢字文字	69
3. エルデネ・オール遺跡	72
01. 契丹文字 1	72
02. 契丹文字 2	74
03. 漢字文字	76
IV. 保存修復計画の方針	79
1. アラシャーン・ハダ遺跡	81
2. セルベン・ハールガ遺跡	81
3. エルデネ・オール遺跡	82
V. 整備活用計画の方針	83
1. アラシャーン・ハダ遺跡	85
2. セルベン・ハールガ遺跡	86
VI. まとめ	87
1. まとめ	89
2. 文献目録	90

< 例 言 >

本報告書は、2008年9月に行われた、「文化遺産国際協力コンソーシアム協力相手国調査(モンゴル) ヘンティ県遺跡状況調査」の成果をまとめたものである。記載した遺跡の位置図ならびに方角は、現地での簡易測定結果による。アラシャーン・ハダ遺跡およびエルデネ・オール遺跡の概要ならびに写真解説は大谷大学文学部 松川節教授が執筆を担当した。セルベン・ハールガ遺跡の概要ならびに銘文詳細については、新潟大学超域研究機構白石典之教授に執筆を依頼した。その他の章については、調査に参加したメンバーで分担して執筆した。

本書の編集は、文化遺産国際協力コンソーシアム事務局 豊島久乃が担当した。

I. 調査の背景と概要

1. 調査の目的

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、モンゴル国の要請に基づき、同国での文化遺産国際協力を推進しており、我が国の包括的かつ効率的な文化遺産国際協力プロジェクトの立案を支援している。本調査では、先の2008年2月に行われた協力相手国調査において、具体的な協力要請のあったヘンティ県所在の銘文や岩画が存在する2カ所の遺跡の保存修復にかかる協力要請に対し、日本として協力できることを具体的に検討するための状況調査を行った。調査の目的は、協力を要請された遺跡の状況調査およびモンゴル側からの協力要望に関する意見聴取を通して、今後の協力のあり方を検討するための情報を整理することである。

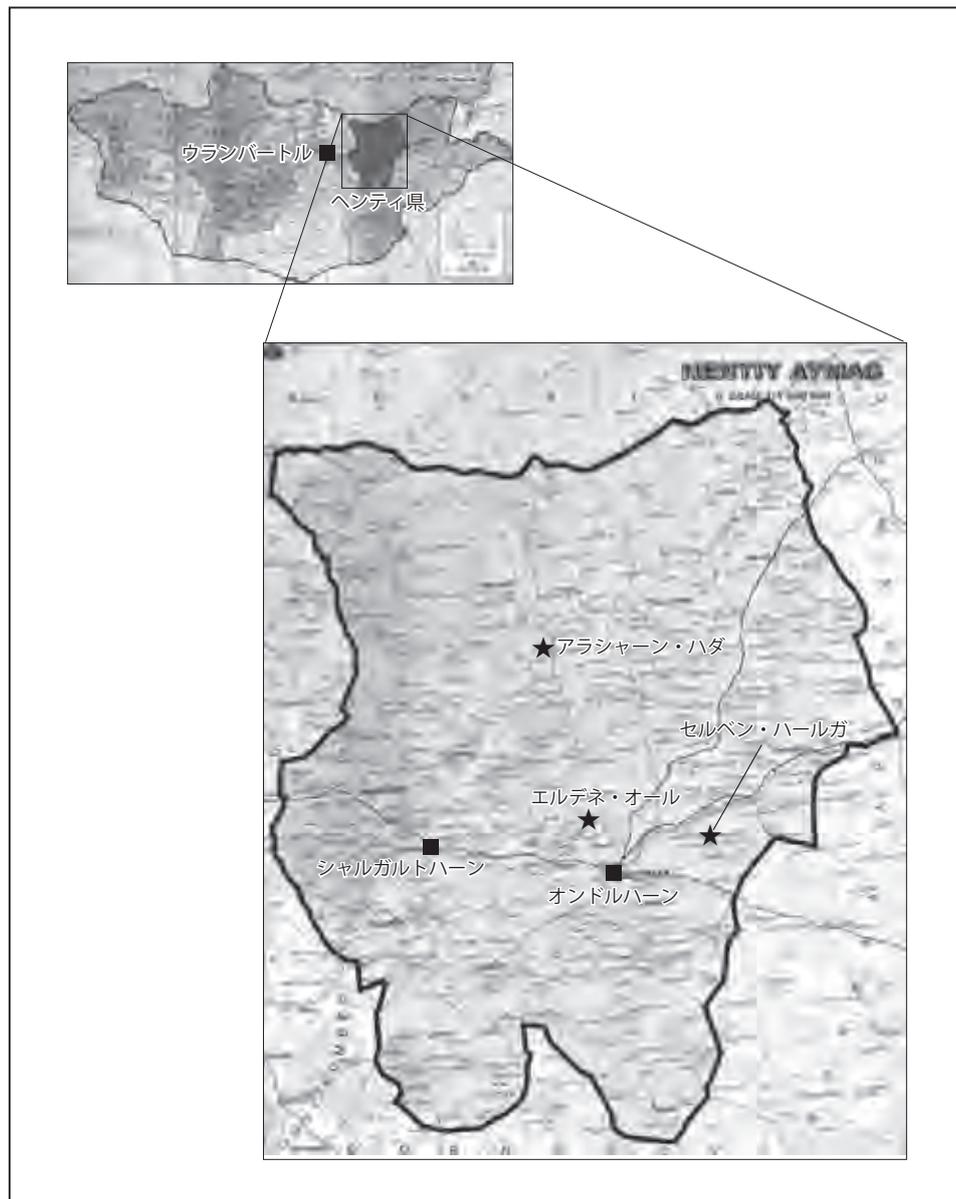


図1：調査地概要

2. 調査メンバー

モンゴル国側メンバー

エンフバット (Enkhbat) (国立文化遺産センター・センター長)

サーロールブヤン (Saruulbuyan) (国立民族歴史博物館・館長)

日本側メンバー

青木繁夫 (サイバー大学 世界遺産学部・教授)

松川節 (大谷大学文学部・教授)

山内和也 (東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・地域環境研究室長)

邊牟木尚美 (東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・特別研究員)

豊島久乃 (文化遺産国際協力コンソーシアム)

通訳

ムンフツェツェグ (Munkhtsetseg) (モンゴル国立大学日本学部・教授)



図 2：調査の行程

3. 調査期間、日程

調査期間：2008年9月5日（金）～9月8日（月）〔4日間〕

9月5日（金）

- 08:00 ウランバートル出発
- 12:00 ジャルガルトハーンにてジャルガルトハーン郡（Jargalthaan Sum）首長と面会、昼食
- 17:50 アラシャーン・ハダ到着、現地にてバトシレート郡（Batshireet Sum）首長と面会、調査実施
- 18:40 調査終了、ツーリスト・キャンプへ向けて移動
- 20:30 ビンデル近郊ツーリスト・キャンプ到着

9月6日（土）

- 08:00 ビンデル近郊ツーリスト・キャンプ出発
- 10:30 近隣の民家にて夏の営地見学
- 11:15 板石墓の調査実施
- 11:40 ウズール・ツオヒオ到着、調査実施
- 12:50 アラシャーン・ハダ到着、調査実施
- 15:00 調査終了（昼食）、
- 15:40 オンドルハーンへ向けて移動
- 20:30 オンドルハーン到着

9月7日（日）

- 08:00 オンドルハーン出発
- 10:40 セルベン・ハールガ到着、調査実施
- 12:30 セルベン・ハールガ調査終了、オンドルハーンへ移動（昼食）
- 16:30 エルデネ・オール到着、調査実施
- 18:00 調査終了、オンドルハーンへ移動
- 19:30 オンドルハーン到着、ヘンティ県立博物館館長主催による懇親会

9月8日（月）

- 08:30 オンドルハーン出発
- 09:30 ヘンティ県立博物館、ヘンティ自然史博物館見学
- 11:40 オンドルハーン郊外石人見学
- 12:00 ウランバートルに向けて出発
- 14:00 ジャルガルトハーンにて昼食
- 18:00 ウランバートル到着、解散

II. 遺跡の概要と既往研究

1. アラシャーン・ハダ遺跡

・遺跡の概要・学術的な位置づけ

ヘンティ県バトシレート郡にあるビンデル山系の東端部にビンデル・オボー（オボーは積石塚の意；モンゴルのシャマニズム信仰において天と地を結ぶ結節点として崇拝される）があり、その東側の山嘴にアラシャーン・ハダと呼ばれる巨岩がある。モンゴル語で「聖水の岩」という意味で、岩の割れ目から滴り落ちる雨水が眼病に効くという言い伝えがある。

ここは、オノン河に合流するホルフ河が流れる広大な河床地帯の西北端であり、特にビンデル・オボーは遙か彼方からでも見える位置にある。地元の古老によると、このオボーは社会主義政策によって制限を被る1929年まで、間断なく祭られていたという。

附近一帯の岩壁には、至るところに旧石器時代、新石器時代の岩画やチベット文字の真言が記されているが、中でもアラシャーン・ハダの岩壁には様々な文字による銘文があり、この岩壁が特別な位置を占めていることがわかる。現認できているものだけでも、突厥文字、契丹文字、モンゴル文字、パспа文字、漢字、アラビア文字、チベット文字による銘文があり、7世紀から現在に至るまで、この地を往来する様々な人々が注目し続けていることを物語っている。

モンゴル人にとって、ヘンティ県はチンギス・ハンの故郷として特別な意味を持っており、中でもビンデル山を、チンギス・ハンが埋葬されたボルハン・ハルドウン山とする説が根強く主張されている。実際、アラシャーン・ハダから西北に20キロ離れたところに位置するオグロクチン・ヘレムという契丹時代の山城が、チンギス・ハンの墓所であるとしてアメリカ・モンゴル共同調査隊によって発掘されたこともあった。

1990年から4年間にわたり、日本・モンゴル共同調査「ゴルバン・ゴル計画」がヘンティ県で行われ、アラシャーン・ハダの岩壁銘文の一部が解読された。第一に、契丹文字銘文のうち年号の部分が「天重熙四年九月十五日」と解読され、重熙四年（西暦1035年）に契丹がモンゴル高原に盛んに進出していたことの裏づけとなった。第二に、漢字銘文のうち「大明皇帝着来」という部分が解読され、14世紀以降、明代になってからもこの地が北アジア史における要衝の一つであったことが明らかにされたのである。

最近では、2005年に日本・モンゴル共同「ビチェースII」調査隊によって、本岩壁銘文のうちアラビア文字ペルシア語によるものと、モンゴル語で「威福持つチンギス・ハンの…」と書かれた墨書が解読されている。

アラシャーン・ハダ岩壁から5m離れた地点には幅6mの岩板が倒れ掛かった状態で埋まっており、表面に「タムガ」と言われる紋章が多数刻まれている。20世紀を代表するモンゴルの考古学者ペルレーはこの紋章を研究し、モンゴル族の起源を紋章によって明らかにしようとした。

アラシャーン・ハダ岩壁の北方2.35kmに位置するウズール・ツォヒオ・ハダには、多くの岩画・チベット文字銘文が見られ、モンゴル側研究者によると、200以上のタムガ紋章が記されているという。アラシャーン・ハダ一帯には、まだまだ未知の銘文が眠っている可能性があるのである。

（松川節）



図3：ヘンティ県、アラシャーン・ハダ

・モンゴル国内での文化財としての位置づけと保存修復計画

アラシャーン・ハダ遺跡は、モンゴル国内で最も重要とされる「二つとない遺産」に指定されているが、これまでに保存修復に関する措置は全くなされていない。モンゴル国では、これらの貴重な遺産の保存と活用が急務であるとして、国家計画の中でも具体的な予算計画を含む修復方針が立案されている。とくに、遺跡の発見に日本人研究者が携わっていたことから、日本からの協力に寄せる期待は大きい。

表 1：アラシャーン・ハダの保存・修復計画
(モンゴル国政令第 303 号 国家プログラムより抜粋 [コンソーシアム仮翻訳])

遺跡名称	アラシャーン・ハダ (ヘンティ県)
修復の内容	洗浄と補強を行い、見学者用の道を作り、野外博物館とする。 解説用の看板を設置する。 ダダルーゴルバン湖間の新たな観光資源とする。
修復予定期間	2009-2010 年
割り当て予算額	1 億トゥグリク (2008 年 9 月時点で約 1000 万円)

(豊島久乃)

写真 001



北側より撮影。中央部の岩がアラシャーン・ハダ、左（東）にホルフ河の氾濫原、右（西）の丘にビンデル・オボーが位置する。

01_RH パノラマ写真 .jpg

写真 002



ウズール・ツォヒオより撮影。

アラシャーン・ハダとウズール・ツォヒオは広い谷をはさんで南北に位置している。

RH273_080906'134028.jpg

写真 003



北側より撮影。

中央の岩の中で、特徴的な形をし、単独で位置するのがアラシャーン・ハダの大岩。

RH259_080906'132605.jpg



写真 004

南側より撮影。

中央の岩のかたまりがアラシャーン・ハダ。

RH007_080905'183345.jpg



写真 005

南側より撮影。

RH095_080905'191956.jpg



写真 006

南側より撮影。

南側からは、アラシャーン・ハダの
特徴的な大岩は見えない。

RH039_080905'185931.jpg

2. セルベン・ハールガ遺跡

・遺跡の概要・学術的な位置づけ

遺跡はモンゴル国ヘンティ（Khentii）県バヤンホタク（Bayankhutag）郡セルベン・ハールガ（Serven khaalga）山にある。ここには周辺からの比高30～50mほどの9つの岩山が、径3kmほどの南に開く半円状に並んでいる。そのほぼ中央に位置する峰の、南斜面に点在する花崗岩の巨岩群の一つに女真銘文、もう一つの漢字銘文が刻まれていた。女真銘文の岩が漢字銘文の岩に対して西に位置する。両者の間隔は約15mであった。

女真銘文は北緯47度27分15秒0、東経111度15分36秒5、海拔1131mに位置する。幅4m、高さ2mの花崗岩の大転石の、南40度東を向いた平坦面の縦135cm、横130cmの範囲に、女真大字143文字が9行にわたり刻まれていた。

漢字銘文は北緯47度27分15秒4、東経111度15分37秒0、海拔1132mに位置する。幅3m、高さ2.5mの花崗岩の大転石の、南50度東を向いた平坦面の縦110cm、横97cmの範囲に、漢字88～90文字が9行にわたって刻まれていた。

両銘文はほぼ同じ内容で、それから判断して『金史』巻94完顔襄伝に登場する「斡里札河の戦い」の武勲を記した「九峯石壁」碑であると考えられている。「斡里札河の戦い」とは、右丞相完顔襄率いる金朝政府軍と、モンゴル高原東南部に遊牧していたタタル族が、現在のモンゴル国東北部を流れるオルズ（Ulz）川で激闘したことを指す。戦いは金朝の勝利に終わり、凱旋途中、完顔襄はその武勲を「九峯の石壁に勒した」と『金史』は伝える。だが、その銘文の所在は長いこと不明であった。

セルベン・ハールガ碑文の存在が知られたのは、1987年のことであった。地元住民から判読不明の文字を刻んだ岩があるとの情報を得たモンゴル国立大学教授で言語学者のシャグダルスレン（Ts. Shagdalsüren）氏が調査し、簡単な報告がなされた。だが、その文字は解読できず、内容は明らかでなかった。その段階では、彼が調査したのは女真銘文のみで、漢字銘文はまだ知られてなかった。

一方の漢字銘文は、1991年に、日本人考古学者加藤晋平氏によって発見された。加藤氏は文章の内容および9つの峰が存在する景観から、この銘文が「九峯石壁」戦勝碑だと断定した。しかも西15m離れて位置する既知の女真銘文も、ほぼ同様の内容であることもわかった。さらに文末の年号から、「斡里札河の戦い」は1196（明昌7）年に起きたことを確認した。この戦いについては、ペルシアの史書『集史』では1194年、中国の正史『金史』は1196年と伝えるが、『金史』の方が正しかったと立証された。

この戦いには『元朝秘史』によると、若き日のチンギス・ハン（テムジン）も金軍の一部将として参戦している。彼の事跡を知る上で貴重な遺跡である。しかしながら、銘文中には彼の名は出てこない。

銘文の本格的な調査は加藤、白石典之、三宅俊彦らによって、1991年に漢字銘文の採拓、2001年と2004年にも女真銘文と漢字銘文の採拓が行われた。

（白石典之）



図4：ヘンティ県、セルベン・ハールガ

・文化財としての位置づけ（保護制度上の位置づけ）

セルベン・ハールガ遺跡は、モンゴル国内で最も重要とされる「二つとない遺産」に指定されているが、これまでに保存修復に関する措置は全くなされていない。モンゴル国では、これらの貴重な遺産の保存と活用が急務であるとして、国家計画の中でも具体的な予算計画を含む修復方針が立案されている。同遺跡は、その発見と調査研究に日本人研究者が関わってきたことから、保存修復処置に関しても日本からの協力を寄せる期待は大きく、文化遺産保存にかかる国家計画にも、日本と共同で保存修復を行うと明記されている。

表 1：セルベン・ハールガの保存・修復計画
（モンゴル国政令第 303 号 国家プログラムより抜粋〔コンソーシアム仮翻訳〕）

遺跡名称	セルベン・ハールガ（ヘンティ県）
修復の内容	日本国と共同で岩の碑文を洗浄し、補強する。 庇を設ける。 型を採取してレプリカを作成する。
修復予定期間	2009 年
割り当て予算額	3,000 万トゥグリク（2008 年 9 月時点で約 300 万円）

（豊島久乃）

・遠景からの写真・位置図



写真 007

南西側より撮影。

矢印の岩山の南東斜面に銘文がある。

SH023_080907'113235.jpg

写真 008



南東より撮影。セルベン・ハールガ全景。

02_SH パノラマ写真 .jpg

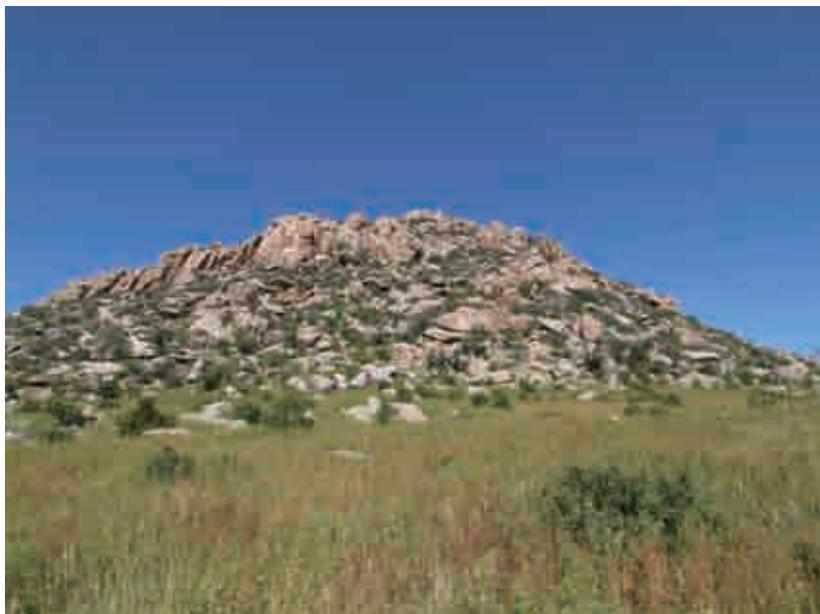


写真 009

南南東より撮影。

中腹の岩塊 2 つに銘文が陰刻されている。

SH048_080907'114236.jpg



写真 010

南南東より撮影。

SH063_080907'115513.jpg

写真 011



女真文字銘文からのパノラマ。南東側を臨む。

03_SH パノラマ写真 .jpg

3. エルデネ・オール遺跡

・遺跡の概要・学術的な位置づけ

ヘンティ県の中心地オンドルハーンから北北西に30km、ムルン郡の北東郡境、ツアリグ河の西側にエルデネ・オールという山がある。「エルデネ」は「宝石」、「オール」は「山」の意。また、エルデネ・オボーニィ・オールと呼ばれることもある。「オボー」は積石塚の意で、かつては山頂にあったと思われるが、現在は山の北方1.6kmの街道沿いに設置されている。

比高80mの岩山の頂上直下に漢文銘文1通と契丹文字(大字)銘文2通が記されている。いずれも墨書である。

漢文銘文は6行40文字で、契丹文字銘文と比べると墨跡がはるかにはっきりしている。6行目に「癸卯五月初二日華仙題」と書かれており、「癸卯」の年(陰暦)5月2日に華仙という中国名を持つ人物によって記されたことがわかる。癸卯年は、さしあたって60年周期でしか比定できないが、墨跡がはっきりしていることより、1900年か1840年かと推測される。



図5：ヘンティ県、エルデネ・オール

契丹文字銘文は第一銘文が12行、第二銘文が7行。第二銘文は極めて判読しにくい。

本銘文は、1979年にモンゴル国の考古学者ペルレーが初めて報告して以来、まったく注目されてこなかった。ペルレーは、「これらの銘文について、わが国の研究者たちは、いずれにしても漢字ではなく、契丹文字の可能性があるとしている」と報告しているが、契丹大字であることは疑いない。2005年8月20日に日本・モンゴル共同「ビチュースII」調査隊によって確認され、2008年、松川節が契丹文字第一銘文の写真を初めて公表している。

ここから南西に30km離れたサルバル・オールという山にも契丹文字(大字)銘文があり、また、そのすぐ南方には、ズーン城、バローン城という契丹時代の2つの都城址が存在する。白石典之の最近の研究によると、ズーン城は1014年、バローン城は1083年に築かれており、いずれも契丹が、当時モンゴル高原に割拠していた阻ト・烏古・敵烈を討伐するための前線基地として機能していたという。サルバル・オール山の契丹文字銘文については、その紀年が1084年であることが判明している。エルデネ・オール山の2つの契丹文字銘文についても、これと近い年代の銘文である可能性が高い。

本遺跡は、上述のペルレー報告があるにもかかわらず、まったく保護の対象にされてこなかった。その理由は、契丹文字・漢字といった、モンゴル人にとって「未知の」文字のみで記されているためと思われる。

(松川節)

・文化財としての位置づけ(保護制度上の位置づけ)

エルデネ・オール遺跡は、現段階では、モンゴル国政府がとりまとめる文化財リストには登録されていない。従って、保存修復計画や整備活用計画も策定されておらず、現状では専門家による学術調査が行われているのみである。

(豊島久乃)

写真 012



岩山全景を南より撮影。頂上の岩体に銘文が存在する。

04_EU パノラマ写真 .jpg

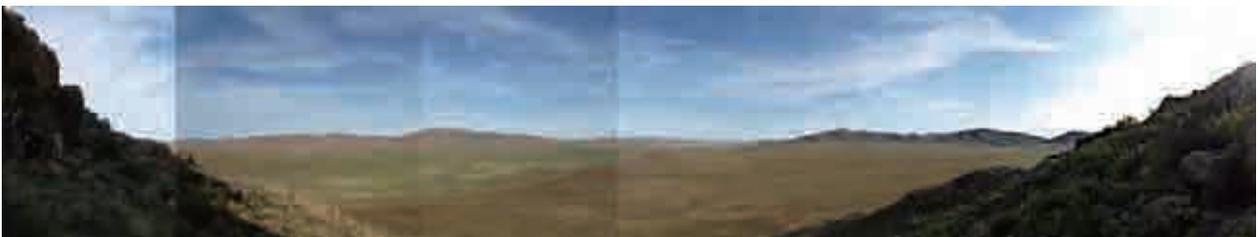
写真 013



銘文のある岩体。南より撮影。

EU191_080907'181646.jpg

写真 014



銘文箇所から南を臨む。

05_EU パノラマ写真 .jpg

III. 遺跡の現況

1. アラシャーン・ハダ遺跡

01. サイの岩画

遺跡名	サイの岩画 (001)	整理番号	RH01	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2279 E110. 1797	方角	南 (172°)	
		材質		
分類 I	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓		<input type="checkbox"/> その他 ()	
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
<input type="checkbox"/> その他 ()				

位置図

概要

東を向いて群れをなす3匹の動物。大きな胴体、短い足、鼻面から上方に飛び出した牙のような角を有しており、第四氷河期末期にモンゴルに棲息しており、その後絶滅したケサイと見てよい。ケサイの骨はアルハンガイ県、ボルガン県、ホブスグル県、セレンゲ県、トゥブ県、ヘンティ県などから見つかり、その歯が、アラシャーン・ハダの旧石器時代前期の遺跡の地層 1.5メートルのところから石器とともに見つかり、この岩画の年代決定の可能性を与えている。

全景



写真 015 全景

南東より撮影。正面にはホルフ河の氾濫原が広がる。

全景



写真 016
スケールなし。岩画のある部分。

RH348_080906'140226.jpg



写真 017
スケールあり。

RH347_080906'140218.jpg

岩画詳細



写真 018
岩の南面に岩画がある。

RH348_080906'140226.jpg



写真 019
岩画部分を拡大したもの。

RH142_080905'193050.jpg

調査風景



写真 020
東から撮影。

RH352_080906'140329.jpg

02. 契丹文字銘文

遺跡名	契丹文字銘文 (002)	整理番号	RH02	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2278 E110. 1798	方角	南南西 (208°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (契丹文字)			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オポー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			位置図

概要

縦書きで3行の墨書が確認できる。右から2行目の上から計4文字、右から3行目の上から計2文字は字形がトレース可能。中でも、2行目の上から1文字目が上下2つの文字パーツから構成されているように見て取れる。すなわち、契丹小字である可能性が高い。アラシャーン・ハダの大岩に書かれた契丹文字墨書は、いずれも契丹大字であり、また、今までモンゴル国で見つかった契丹文字資料は全て契丹大字であった。つまり、この契丹文字銘文は、モンゴル国に存在する最初の契丹小字銘文である可能性がある。

全景



写真 021 全景

- ① RH01 サイの岩画のある岩。20m ほど離れて位置する。
- ② RH02 契丹文字銘文のある岩。

全景



写真 022
銘文のある部分。スケールなし。

RH384_080906'141054.jpg



写真 023
スケールあり。

RH172_080905'193444.jpg

全景



写真 024
RH14 頂上部にあるオボーから撮影。

RH185_080905'193802.jpg



写真 025
南東より撮影。

RH651_080906'155553.jpg

保存状態



写真 026
契丹文字銘文のある岩

方形にくぼんだ部分に墨書による契丹銘文がある。

降った雨が岩上部の岩に溜まって徐々に浸みだしてきて、銘文部分に流れ出てきている。

岩は比較的良い状態であるが、岩の上部から浸透した雨水に塩類が溶け出し、銘文表面上に浸み出した結果、不溶性塩類(?)が銘文上に沈着していると思われる。

RH172_080905'193444.jpg

03. タムガのある石盤

遺跡名	タムガのある石盤	整理番号	RH03	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1795	方角	東北東(56°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input checked="" type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボ-		
	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

この石盤に数多くのタムガ（紋章）が刻まれていることは、1968年にモンゴルの考古学者ペルレーによって初めて注目され、同時に半ば地中に埋まっていた石盤の発掘が行われた。石盤は縦6メートル、横2～3メートル、厚さ60～70センチで、東面に約180、西面に約40、側面に約50、計約270のタムガが刻まれている。石盤の発掘によって、新石器時代、青銅器時代、契丹時代の遺物が見つかったため、これらのタムガは、長い歴史時代にわたって、その代々に刻まれてきたものであろうと、モンゴルの考古学者は推定している。

全景



写真 027 全景

04a アラシャーン・ハダ（大岩）の前（東側）に位置する。

全景



写真 028
東から撮影。スケールなし。

RH431_080906'142333.jpg



写真 029
スケールあり。

RH430_080906'142322.jpg

全景



写真 030
西から撮影。スケールなし。

RH447_080906'142719.jpg



写真 031
スケールあり。

RH446_080906'142707.jpg

全景



写真 032
南から撮影。スケールなし。

RH441_080906'142554.jpg



写真 033
北から撮影。スケールなし。

RH440_080906'142528.jpg



写真 034

石盤の西側。銘文の可能性のある陰刻。

IMG_3764.JPG



写真 035

タムカの刻印のある石盤

周辺には、発掘調査のため、大きく溝が掘られている。岩自体は、比較的よい状態である。かつては、岩の下半分のやや色が濃くなっていた部分まで埋まっていたという。今後の保存対策を考慮すると、板石周辺の溝をある程度の深さまで埋め戻す必要がある。

RH324_080906'135609

04a. アラシャーン・ハダ（大岩）東面

遺跡名	アラシャーン・ハダ（大岩）東面	整理番号	RH04a	
調査日	2008年9月6日 (004)	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1795	方角	東 (95°)	
		材質		
分類 I	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (ウイグル式モンゴル文字、ハスパ文字、漢字、 テュルク文字、契丹文字、アラビア文字、チベット文字)			
	<input type="checkbox"/> 岩面	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書			
	<input checked="" type="checkbox"/> 彩色			
分類 II	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

テュルク文字、契丹文字、ウイグル式モンゴル文字、ハスパ文字、漢字、アラビア文字、チベット文字による7世紀～20世紀に至るまでの刻文と墨書が残されており、この場所が、様々な遊牧集団或いは外国からの使節によって、時代を越えて「神聖視」され、参詣の場所と捉えられてきたことがわかる。刻文と墨書は、岩面の右側と左側にそれぞれグループをなすように書かれており、突厥文字のもの3点、契丹文字のもの5点、ウイグル式モンゴル文字9点、ハスパ文字のもの1点、漢字のもの1点、アラビア文字のもの1点、チベット文字のもの1点、計21点が確認されている。このうち、刻文は突厥文字の3点（ともに陰刻）のみで、残りは全て墨書である。

今までに解読・研究が公表されている銘文は7点であり、そのうち5点は日本の研究者によるものである。

全景



写真 036 全景

東より撮影。中央の大きな岩がアラシャーン・ハダ、その前に RH03 タムガのある石盤がある。

RH653_080906'155617.jpg

全景



写真 037
東より撮影。

RH318_080906'135548.jpg



写真 038
東より撮影。スケールあり。

RH466_080906'143654.jpg

全景



写真 039
南より撮影。

RH643_080906'155252.jpg



写真 040
北より撮影。

RH674_080906'164410.jpg

全景



写真 041
北東より撮影。

RH132_080905'192915.jpg



写真 042
RH14 頂上部にあるオポー付近より撮影。

RH355_080906'140347.jpg



写真 043
南西より撮影。

RH006_080905'182643.jpg



写真 044
東面銘文の上部にオーバーハングしている部分。

RH155_080905'193246.jpg



写真 045 銘文全体配置

銘文詳細



銘文 A01
アラビア文字ペルシア語銘文 5 行？
「大明皇帝のおおせによって…」 See 松田・村岡・松川
2006.



銘文 C01
漢字漢文銘文 4 行。
「?? / 奉 / 大明皇帝差來 / ??」

銘文詳細



銘文 K01
契丹文字銘文 13 行。内容不詳。



銘文 K02
契丹文字銘文 3 行。
内容不詳。

銘文詳細



銘文 K03
契丹文字銘文 5 行。
内容不詳。



銘文 K04
契丹文字銘文 3 行。
内容不詳。



銘文 K05
契丹文字銘文 11 行。
1 行目（一番右の行）：「天重熙四年九月十五日■」（= 西暦 1035 年） See 松川 2008, pp.105-106.



銘文 Tu01
テュルク文字銘文 1 行。
「ここで 私は石（碑？）を私が書いた。」



銘文 K03
契丹文字銘文 5 行。
内容不詳。



銘文 K04
契丹文字銘文 3 行。
内容不詳。



銘文 Tu02
テュルク文字銘文 1 行。
「名付けられた、將軍」



銘文 Tu03
テュルク文字 1 文字。
（タムガか？）



銘文 UM01
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 15 行。内容不詳。



銘文 UM02
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 5 行。内容不詳。



銘文 UM03
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 4 行。内容不詳。



銘文 UM04
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 5 行。
「ダイスン・ハーンのおおせによって…」



銘文 UM05
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 7 行。内容不詳。



銘文 UM06
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 5 行。
チベット語の音写。内容不詳。



銘文 UM07
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 6 行。
チベット語の音写。内容不詳。



銘文 UM08
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 10 行。
チベット語の音写。内容不詳。



銘文 UM09
ウイグル式モンゴル文字モンゴル語銘文 1 行。
「威福持つチンギス・ハンの…」



銘文 P01
パスパ文字モンゴル語モンゴル語銘文 1 行。
jar-liG (おおせ)



銘文 Tib01
チベット文字チベット語銘文 1 行。
「//// パドマ・スイド」意味不詳。



写真 046
銘文のある岩山（東側）

東斜面にある露頭の岩山の上に載った岩がひさしを出すようにオーバーハングした下に漢文、アラビア文字などの銘文がある。
銘文がある岩面は、地上面から、粒子の大きい層、粘板岩(?)のような質感を持った層、粒子の粗い層の3層に分かれている。

RH318_080906'135548



写真 047
赤色顔料による彩色

粘板岩(?)のような質感を持った層の部分には、墨書銘文、陰刻部分、赤色顔料による彩色がある。
銘文部分の岩の数箇所に、表面剥離が見られる。

RH424_080906'142222



写真 048
流れた水による銘文の表面の汚れの状態

降った雨がひさし部分を構成する上部の岩にたまり、その水が徐々に浸みだしてきて銘文部分に流れてきている。岩の中に水が浸透している間に溶け出した塩類が浸み出した結果、不溶性塩類(?)が銘文の上に沈着している。銘文のある岩層部分では、表面が粉状に崩壊している箇所は見られない。その上の粒子の粗い砂状に固まった岩層では、強くこすると粒子が落ちる傾向にある。

RH162_080905'193328



写真 049
鳥の糞による汚れ

鳥の巣穴があり、その糞による汚れが見られる。

また亀裂部分には、ネズミまたはコウモリの糞と思われる堆積がある。

RH467_080906'143655.jpg

04b. アラシャーン・ハダ（大岩）南面

遺跡名	アラシャーン・ハダ（大岩）南面	整理番号	RH04b	
調査日	2008年9月6日 (004)	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1794	方角	南 (180°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input checked="" type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input checked="" type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

複数のタムガが陰刻されている。
また、彩色による岩画もしくはタムガのようなものも見受けられる。

全景



写真 050 全景
南東から撮影。

全景



写真 051
南から撮影。スケールなし。

RH500_080906'150335.jpg



写真 052
スケールあり。

RH496_080906'150315.jpg

岩面詳細



写真 053

RH501_080906'150343.jpg



写真 054

RH536_080906'151416.jpg

タムガ詳細



写真 055

RH534_080906'151406.jpg



写真 056

RH538_080906'151438.jpg

05. 人物画

遺跡名	人物画 (005)	整理番号	RH05	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1794	方角	南南東 (146°)	
		材質		
分類 I	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (チベット文字)			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

被帽人物画（陰刻）である。モンゴルの研究者は、この辺り一帯がチンギス・ハーンの祖父の弟であるホタラ・ハーンの遊牧地であったとして、この人物をホタラ・ハーンに比定する。可能性として否定はできないであろう。なお、人物画の上部に書かれたチベット文字（陰刻）は、「オム・マニ・パドマイ・フーン」という真言であり、人物画が刻まれた時期とは一致しないものと思われる。

全景



写真 057 全景

全景



写真 058
スケールなし。

RH506_080906'150511.jpg



写真 059
スケールあり。

RH503_080906'150446.jpg

銘文・岩画詳細

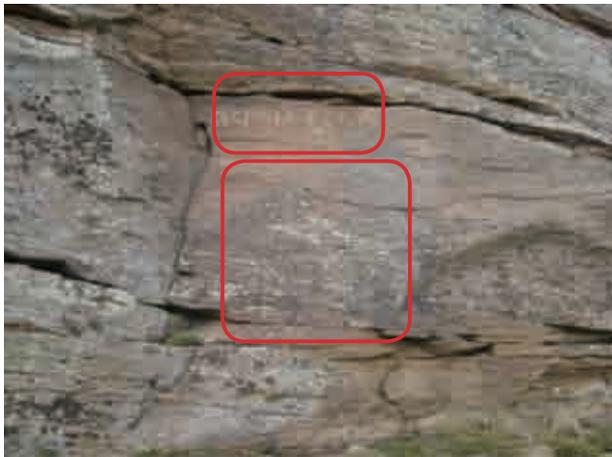


写真 060
上部が写真 061。下部が写真 062。

RH510_080906'150803.jpg

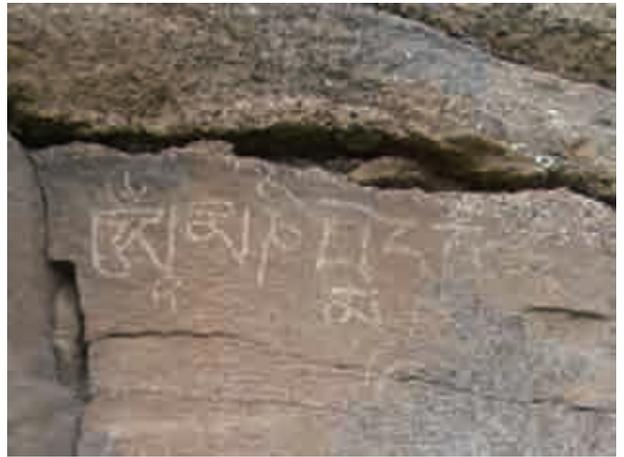


写真 061

RH510_080906'150803.jpg

銘文・岩画詳細



写真 062
人物像。

RH510_080906'150803.jpg

06. モンゴル文字銘文

遺跡名	モンゴル文字銘文(006)	整理番号	RH06	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1793	方角	南南西 (216°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (モンゴル文字)			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボ		
分類Ⅱ	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

ウイグル式モンゴル文字による墨書。行数不詳。きわめて判読しにくい。

全景



写真 063 全景

全景



写真 064
スケールなし。

RH518_080906'150850.jpg



写真 065
スケールあり。

RH515_080906'150832.jpg

碑文詳細



写真 66
碑文。

RH117_080905'192403.jpg

07a. タムガのある横たわった岩

遺跡名	タムガのある横たわった岩	整理番号	RH07a	
調査日	2008年9月6日 (007)	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2275 E110. 1794	方角	東北東(60°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input checked="" type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

複数のタムガ（紋章）が刻まれている。

全景



写真 067 全景

①は、RH04 アラシャーン・ハダの大岩

全景



写真 068
スケールなし。

RH526_080906'151234.jpg



写真 069
スケールあり。

RH525_080906'151228.jpg

タムガ詳細



写真 070

RH551_080906'152057.jpg

07b. チベット文字銘文

遺跡名	チベット文字銘文(007)	整理番号	RH07b	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2275 E110. 1794	方角	南南西(196°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文(チベット文字)			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オポー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓		<input type="checkbox"/> その他()	
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他()			

位置図

概要

チベット文字で om と書かれているのがはっきりと読み取れるが、その他は判読しにくい。

全景



写真 071 全景

全景

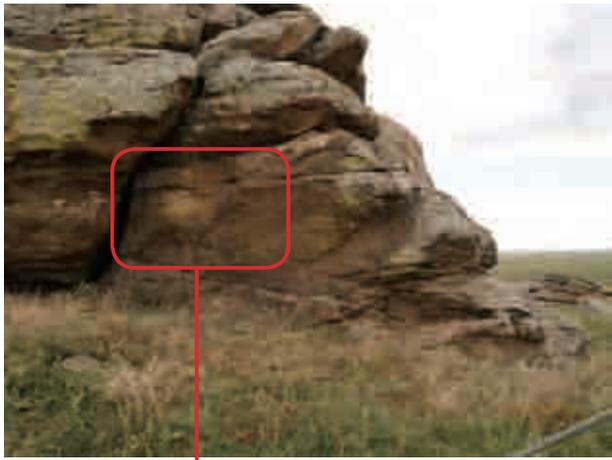


写真 072
スケールなし。

RH541_080906'151637.jpg



写真 073
スケールあり。

RH539_080906'151611.jpg

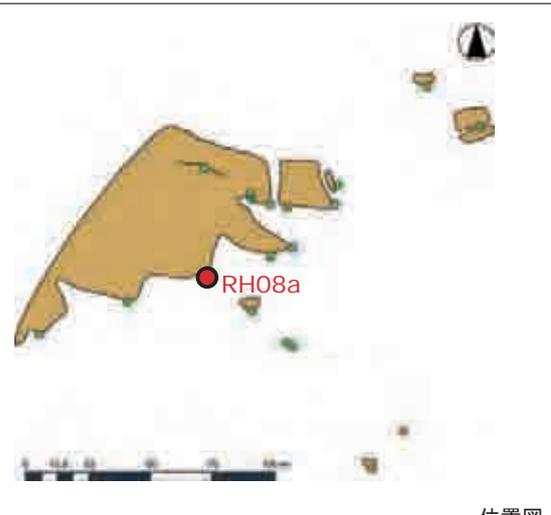
詳細



写真 074

RH543_080906'151746.jpg

08a. 石器時代の遺跡

遺跡名	石器時代の遺跡 (008)	整理番号	RH08a	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2275 E110. 1792	方角	南 (180°)	
		材質		
分類 I	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓		<input type="checkbox"/> その他 ()	
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
<input type="checkbox"/> その他 ()				

位置図

概要

埋め戻されていない遺跡。

全景



写真 075 全景
東南より撮影。

全景



写真 076
スケールなし。

RH550_080906'152049.jpg



写真 077
スケールあり。

RH547_080906'152037.jpg

岩面詳細



写真 078

RH558_080906'152204.jpg



写真 079
写真 078 を拡大。2 頭の馬? の図像がみられる。

RH558_080906'152204.jpg

保存状況



写真 080
前方には、発掘調査区がそのまま残されている。

RH552_080906'152100.jpg

08b. 岩上の記号

遺跡名	岩上の記号 (008)	整理番号	RH08b	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2275	方角	南 (180°)	
	E110. 1792	材質		
分類 I	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (チベット文字)			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
分類 II	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

様々な記号・文様とともに、チベット文字1行「オム・マニ・パドメ・フーン」が刻されている。
 (今回の調査では陰刻されているものが岩画か銘文か判別がなかったため、上段の分類には、銘文以外を記入していない)

全景



写真 081 全景
 東南東より撮影。

全景



写真 082
スケールなし。

RH569_080906'152551.jpg



写真 083
スケールあり。

RH567_080906'152533.jpg

詳細



写真 084

RH570_080906'152556.jpg

詳細



写真 085
写真 084 を拡大。

RH570_080906'152556.jpg

09. 眉型の岩

遺跡名	眉型の岩 (009)	整理番号	RH09	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2274 E110. 1791	方角	南南西 (196°)	
		材質		
分類 I	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

人の眉型 (片方) をしている。

全景



写真 086 全景
南東より撮影。

全景



写真 087
スケールなし。

RH573_080906'152904.jpg



写真 088
スケールあり。

RH572_080906'152855.jpg

詳細



写真 089

RH582_080906'153101.jpg

詳細

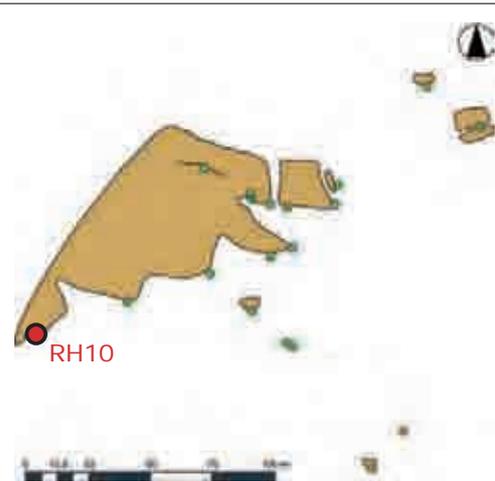


写真 090
写真 089 を拡大。

RH582_080906'153101.jpg

10. ウマの岩画

遺跡名	ウマの岩画 (010)	整理番号	RH10
調査日	2008年9月6日	年代	
位置 (緯度・経度)	N048. 2273 E110. 1789	方角	南西 (206°)
		材質	
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()		
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石	
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボ-	
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()	
	<input type="checkbox"/> 墨書		
	<input type="checkbox"/> 彩色		
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻		
	<input type="checkbox"/> その他 ()		



位置図

概要

尖った耳，まっすぐな脚のウマ，あるいはシカ類が描かれている。

全景



写真 091 全景
東より撮影

10_RH10 パノラマ写真 .jpg

全景



写真 092
スケールなし。

RH587_080906'153314.jpg



写真 093
スケールあり。

RH586_080906'153304.jpg

詳細



写真 094
岩画の詳細。

RH589_080906'153338.jpg



写真 095
岩画の詳細。

RH598_080906'153440.jpg

11. 野生ヤギの岩画

遺跡名	野生ヤギの岩画 (011)	整理番号	RH11	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2274 E110. 1793	方角	南 (184°)	
		材質		
分類 I	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボ-		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓		<input type="checkbox"/> その他 ()	
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

突厥のアシナ氏のタムガとして有名な野生ヤギをはじめ、櫛型のタムガなどが描かれている。

全景



写真 096 全景
東南東より撮影。

11_RH11 パノラマ写真 .jpg

全景



写真 097
スケールなし。

RH605_080906'153725.jpg



写真 098
スケールあり。

RH602_080906'153633.jpg

詳細



写真 099
岩画の詳細。

RH611_080906'153840.jpg

12. クマの足跡岩

遺跡名	クマの足跡岩	整理番号	RH12	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2270 E110. 1796	方角	南 (174°)	
		材質		
分類 I	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input checked="" type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オポー		
	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
分類 II	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input type="checkbox"/> 陰刻			
	<input checked="" type="checkbox"/> その他 ()			

位置図

概要

クマの足跡に似た文様が描かれている。ペルレー (Пэрлээ 1976, pp.150-152) によると、周辺にこの種の文様は 20 以上存在している。

全景



写真 100 全景
南東より撮影。

12_RH12 パノラマ写真 .jpg

全景



写真 101
スケールなし。

RH637_080906'154903.jpg



写真 102
スケールあり。

RH634_080906'154848.jpg

詳細



写真 103

RH633_080906'154831.jpg



写真 104

RH654_080906'155633.jpg

13. 頂上部にあるオボー

遺跡名	頂上部にあるオボー	整理番号	RH13	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2276 E110. 1793	方角	NA NA	
		材質		
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input checked="" type="checkbox"/> オボー		
	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input type="checkbox"/> 陰刻			
	<input checked="" type="checkbox"/> その他 (積石塚)			

位置図

概要

オボーはモンゴル語で積石塚の意。天と地を結ぶ結節点であり、シャマニズム的崇拝の対象物である。

全景



写真 105 全景
前方にホルフ河の氾濫原が広がる。

13_RH13 パノラマ写真 .jpg



写真 106
西より撮影。

RH345_080906'140214.jpg



写真 107
RH05 人物画、RH06 モンゴル文字銘文のある岩の上に
オボーがある。

RH392_080906'141251.jpg

14. 岩の上の岩画

遺跡名	岩の上の岩画	整理番号	RH14	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N048. 2277 E110. 1792	方角	南西(205°)	
		材質		
分類Ⅰ	<input type="checkbox"/> 銘文 ()			
	<input checked="" type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
<input type="checkbox"/> その他 ()				位置図

概要

頂上部にあるオボーのすぐ下の岩壁に描かれている。

全景



写真 108 全景

RH365_080906'140456.jpg

全景



写真 109
スケールなし。

RH280_080906'135057.jpg



写真 110
スケールあり。

RH279_080906'135047.jpg

詳細



写真 111
岩画の詳細。

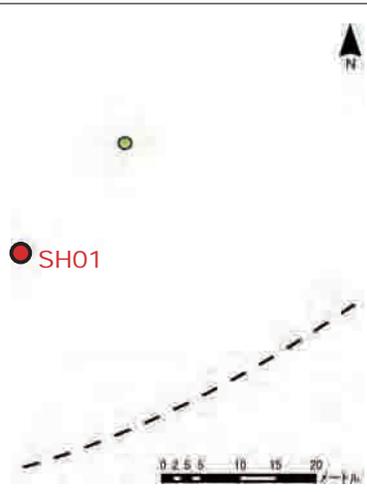
RH284_080906'135309.jpg

2. セルベン・ハールガ遺跡

01. 女真文字

遺跡名	女真文字	整理番号	SH01
調査日	2008年9月6日	年代	
位置 (緯度・経度)	N047. 2726	方角	南 (174°)
	E111. 1561	材質	
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文 (女真文字)		
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石	
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー	
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓		
	<input type="checkbox"/> その他 ()		
	<input type="checkbox"/> 墨書		
	<input type="checkbox"/> 彩色		
分類Ⅲ	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻		
	<input type="checkbox"/> その他 ()		

位置図



概要

女真文1行目～2行目は、漢字文と内容的に一致する。ただ、2行目中ほどの「go-sə-gia」を「国子監」と復元するも、漢字に対応する箇所は見当たらない。女真文3行目～4行目上段までは漢字文と内容的にほぼ一致しているが、中段の「夜 [dolborin]」は漢字銘文には見いだせない。4行目下段からは漢字銘文と同じように地名の羅列と考えられる。7行目は風化が激しく、判読不明の箇所が多いが、漢字文の7行目と同様に、戦闘の過程、具体的な功績が手短かに述べられていると想定する。8行目は漢字8行目とほぼ同じ内容である。女真文字による元号や数字の表記が興味深い。なお、「月」「日」は漢字も女真字も同様に書かれる。9行目は漢字9行目と同じ内容であるが、名付けられた山の名は、まったく異なる。漢字の山名は「鵬巖巖」と読み、現代中国語では [Diao lie yan] と発音する (烏拉熙春 2006b: 52-53)。女真文は [sarbin xai-ga] と復元し、「セルベン・ハールガ [Serven khaalga]」に極めて近い音となっている。この [sarbin xai-ga] という当時の女真語に「鷲の狩をする岩山」という意味があったかは、明らかになっていない。ちなみの現在モンゴル語で [Serven khaalga] は、「ゴツゴツした岩の門」意味で、9つの岩山が林立している景観が、道路をふさぐ門のように見える様子と一致する。漢字文の場合は「命」という字を用いているので、銘文を刻みつける際に漢地風に新たに命名された可能性がある。一方、女真文は「称する」ということで、従来地元のモンゴル系住民の間で呼ばれていた名前を踏襲したとも考えられよう。

全景



写真 112 全景

SH064_080907'115518.jpg

全景



写真 113
スケールなし。

SH114_080907'120804.jpg



写真 114
スケールあり。

SH107_080907'120618.jpg

銘文詳細



写真 115

SH116_080907'120809.jpg



写真 116
背後には不安定な岩が重なっている。

SH364_080907'130138.jpg

詳細



写真 117
上部にも不安定な岩が重なっている。

SH278_080907'125020.jpg



写真 118
東側下より撮影。

SH365_080907'130133.jpg



写真 119
上部より撮影。

SH328_080907'125731.jpg



写真 120
植物が岩の下部に見られる。

SH307_080907'125522.jpg



写真 121
女真文字銘文

不整形な三角形をした板石で中央部分をきれいに削ってから研磨して、銘文を陰刻したようである。銘文の周辺及び裏側には、花崗岩特有の表層剥離が見られる。その剥離はかなり進行しており、放置しておけば近い将来、銘文にまで被害が及びそうである。

SH194_080907'123010.jpg



写真 122
石材底部の劣化状況

板石は岩盤の上に立っている状態であり、その下を雨水が流れるため底部では表層剥離の破壊が進行している。

SH300_080907'125348.jpg

02. 漢字文字

遺跡名	漢字文字	整理番号	SH02	
調査日	2008年9月6日	年代		
位置 (緯度・経度)	N047.2725	方角	南東(132°)	
	E111.1561	材質		
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文(漢字)			
	<input type="checkbox"/> 岩面	<input type="checkbox"/> 鹿石		
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー		
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他()		
	<input type="checkbox"/> 墨書			
	<input type="checkbox"/> 彩色			
	<input checked="" type="checkbox"/> 陰刻			
	<input type="checkbox"/> その他()			

位置図

概要

セルベン・ハールガ漢字銘文は次のようであった。□は確定しない、あるいは判読不明の箇所である。

- 1 大金開府儀同三司尚書右丞
- 2 相任国公 宗室襄奉
- 3 帝命帥師討北朮孛背叛由
- 4 阿刺胡麻乞罕赤勒曩斡禮
- 5 頼柏速訛直笱里馬不論
- 6 打刺□曩至烏紬河晨□
- 7 滅過半□核□回□□
- 8 班師時明昌七年六月 日
- 9 命□山名曰鷓巖巖

1～2行目は「大金国の開府儀同三司、尚書右丞、任国公で、宗室(皇帝の一族、すなわち完顔氏)の襄……」とあった。つづいて3行目は、「(金朝の)帝は、北朮孛(タタル)が背叛したので師(軍隊)を帥いて討伐するように、と(襄に)命じた」とあり、『金史』の伝える「斡里札河の戦い」と一致する。

3行目末尾の「由」からは行軍の状況が記され、おおかたは地名の羅列だと考えられる。6行目中ほど、「至烏紬河晨□」の部分で到達地点が明記される。「至」は文字通り「至った」という意味の動詞で、その後ろに到達場所が記される。

6行目下部～7行目の「晨□滅過半打核□回□□」は、おそらく戦闘のようす、および戦果が記されていると思われるが、風化が激しく判読が難しい。

8行目は「師(軍隊)を班(かえ)す。時に明昌七(1196)年六月 日」となる。『金史』の記述を追うと、完顔襄は明昌7(1196)年陰暦2月、中都にて時の金帝章宗に謁見したのち、北伐を開始した。そして、同年9月に中都に凱旋し、武功により左丞相に昇任している。その間に戦いが行われたことは想定できたが、史料中に具体的な日時は記されていない。本銘文の発見により、戦いは2月以降に始まり、遅くとも6月には終結していたことが明らかになる。

9行目は、「この銘文を刻むにあたり、その地名を完顔襄が「鷓巖巖」と命名した」という意味であろう。「鷓(わし)を巖(獺)る巖(岩山)」という内容で、9つの岩山が林立し、そこをねぐらとする鷲が上空を舞う様子を、そのまま地名としたようだ。

なお、セルベン・ハールガ付近は、1410年と1414年の明の永楽帝によるモンゴル高原遠征や、1696年の清の康熙帝によるオイラト遠征の際にも、親征軍の本隊が通過したと、史料から想定できる。古くから中国とモンゴル高原奥地とを結ぶ、重要な交通路がこの付近を通っていたと考えられる。完顔襄はこれらの親征の先駆的役割を果たしたと評価できよう。



SH064_080907'115518.jpg



写真 124

SH167_080907'121704.jpg



写真 125
スケールあり。

SH174_080907'122151.jpg



写真 126
銘文のある岩の背後上部より撮影。

SH235_080907'123752.jpg

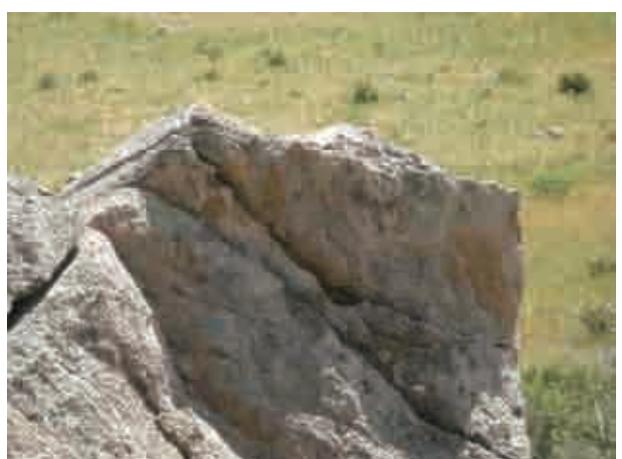


写真 127
剥離や亀裂が見られる。

SH236_080907'123759.jpg



写真 128
背後、西側より撮影。

SH243_080907'123931.jpg



写真 129
亀裂が見られる。

SH246_080907'123951.jpg



写真 130
表層剥離の状態

かなり質の悪い花崗岩を利用して銘文を刻んでいる。質が悪いため、花崗岩特有の層状剥離がひどく銘文のかなりの部分が失われている。

SH434_080907'131519.jpg



写真 131
亀裂の状態

多くの亀裂は表面まで達している。

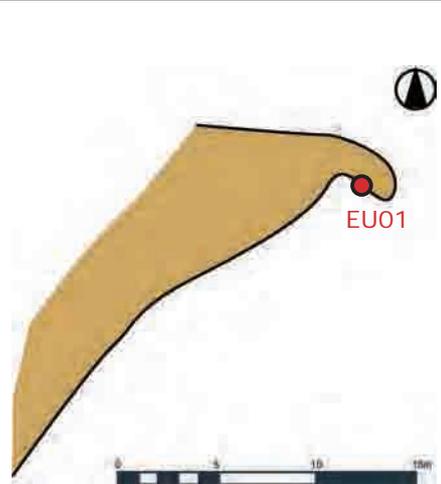
SH421_080907'131210.jpg

3. エルデネ・オール遺跡

01. 契丹文字 1

遺跡名	契丹文字 1	整理番号	EU01
調査日	2008年9月7日	年代	
位置 (緯度・経度)	N047. 3551	方角	南西(212°)
	E110. 3252	材質	
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文(契丹文字)		
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石	
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オポー	
分類Ⅱ	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他()	
	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書		
	<input type="checkbox"/> 彩色		
	<input type="checkbox"/> 陰刻		
	<input type="checkbox"/> その他()		

位置図



概要

契丹大字で毎行1～13文字、計12行が墨書されている。行は右から左に進む。内容不詳。

全景



写真 132 全景

EU180_080907'181351.jpg

全景



写真 133
スケールなし。



写真 134
スケールあり。

銘文詳細



写真 135

EU116_080907'175533.jpg



写真 136

EU119_080907'175629.jpg

保存状態



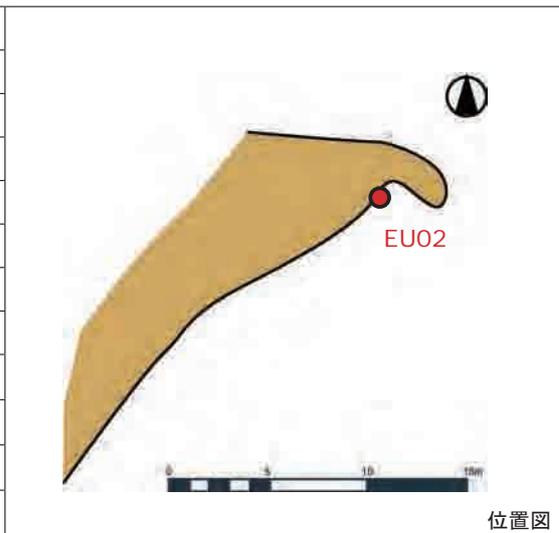
写真 137
亀裂の状態

全体的に表面剥離はなく、比較的良い状態である。一部に雨水の流れる場所に銘文がある。
一カ所だけ石に大きな亀裂があり、将来崩壊の危険性があると思われる。

EU150_080907'180930.jpg

02. 契丹文字 2

遺跡名	契丹文字 2	整理番号	EU02
調査日	2008年9月7日	年代	
位置 (緯度・経度)	N047. 3551	方角	南東(132°)
	E110. 3252	材質	
分類 I	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文(契丹文字)		
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石	
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オポー	
分類 II	<input type="checkbox"/> 墳墓	<input type="checkbox"/> その他()	
	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書		
	<input type="checkbox"/> 彩色		
	<input type="checkbox"/> 陰刻		
	<input type="checkbox"/> その他()		



位置図

概要

契丹大字で毎行 12 ~ 13 文字, 計 7 行が墨書されている。行は右から左に進む。内容不詳。

全景



写真 138 全景

EU166_080907'181157.jpg

全景



写真 139
スケールなし。

EU063_080907'174036.jpg



写真 140
スケールあり。

EU044_080907'173752.jpg

銘文詳細



写真 141

EU006_080907'165935.jpg

保存状態



銘文部分
雨水が流れる跡

銘文部分
雨水が流れる跡

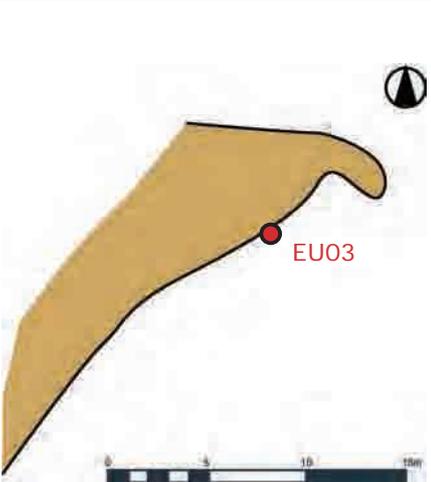
写真 142
亀裂の状態

全体的に表面剥離はなく、比較的よい状態である。一部に雨水の流れる場所に銘文がある。一箇所だけ石に大きな亀裂があり、将来崩壊の危険性があると思われる。

EU150_080907'180930.jpg

03. 漢字文字

遺跡名	漢字文字	整理番号	EU03
調査日	2008年9月7日	年代	
位置 (緯度・経度)	N047.3551	方角	南東(132°)
	E110.3252	材質	
分類Ⅰ	<input checked="" type="checkbox"/> 銘文(漢字文字)		
	<input type="checkbox"/> 岩画	<input type="checkbox"/> 鹿石	
	<input type="checkbox"/> タムガ	<input type="checkbox"/> オボー	
分類Ⅱ	<input checked="" type="checkbox"/> 墨書		
	<input type="checkbox"/> 彩色		
	<input type="checkbox"/> 陰刻		
	<input type="checkbox"/> その他()		



位置図

概要

6行40文字の墨書で、契丹文字銘文と比べると墨跡がはるかにはっきりしている。6行目に「癸卯五月初二日華仙題」と書かれており、「癸卯」の年(陰暦)5月2日に華仙という中国名を持つ人物によって記されたことがわかる。癸卯年は、さしあたって60年周期でしか比定できないが、墨跡がはっきりしていることより、1900年か1840年かと推測される。

全景



写真 143 全景

EU187_080907'181512.jpg



写真 144
スケールなし。

EU055_080907'173902.jpg



写真 145
(スケールあり)

EU053_080907'173850.jpg

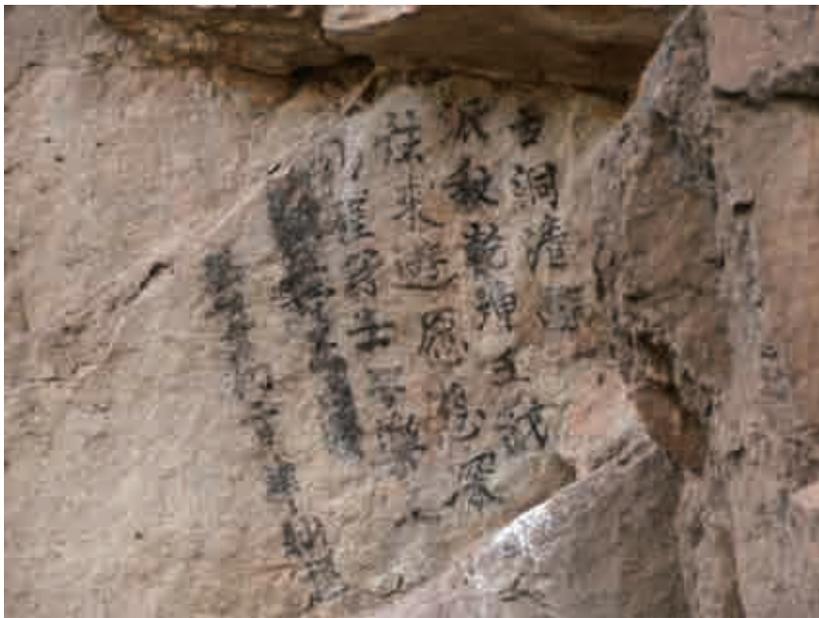


写真 146
亀裂の状態

銘文周辺には、鳥の糞による汚れが見られる。

EU008_080907'170002.jpg

IV. 保存修復計画の方針

1. アラシャーン・ハダ遺跡

調査方針

紫外線蛍光と赤外線撮影といった光学的調査により、不溶性塩類(?)で覆われたり、風化したりした墨書銘文の判読を試みる。また、斜光線により凹凸、亀裂、剥離の有無や状況を確認する。

科学的分析により石材の同定と塩類の同定分析を行う。

- ・岩石の実測図作成、銘文の解読調査などの実施
- ・現状記録のためにレプリカ作製
- ・岩石の同定、劣化状態、析出している塩類の同定などの保存状態の調査
- ・クリーニング、石材強化、剥落防止処置などの修復処置が必要

契丹文字銘文 (RH02)

亀裂部分から流れ出る雨水を止める必要がある。亀裂部分にシリコン樹脂のコーキング材を入れて雨水の浸入を防止する。

アラシャーン・ハダ大岩銘文 (RH04)

浸みだしてくる水は、銘文を汚しているため防止対策が必要であると思われる。その対策としては、雨水の浸透を防止する必要がある。亀裂を充填して雨水の浸透を防止するか、あるいは、岩の上に鉛板のようなものを置いて雨水の浸透を防止することが可能である。オーバーハングの先端から出る水はそのままでもよいが、岩層の間から浸み出る水には処置が必要である。

鳥の糞については、まず水を使用してクリーニングする必要がある。鳥の糞の原因は鳥の巣があるためであるので、巣穴に石を詰め、その上にエポキシ樹脂を充填して封鎖することが必要である。

亀裂部分の糞は掃除して、エポキシ樹脂擬石の充填が必要である。

粒子状の岩層の剥落は、シラン樹脂による強化処置が必要である。

2. セルベン・ハールガ遺跡

調査方針

- ・岩石の実測図作成、銘文の解読調査などの実施
- ・現状記録のためにレプリカ作製
- ・岩石の同定、劣化状態、析出している塩類の同定などの保存状態の調査
- ・クリーニング、石材強化、剥落防止処置などの修復処置が早急に必要

女真文字 (SH01)

表層剥離については、剥離しないようにエポキシ樹脂を注入して接着を図る必要がある。板石底部に雨水が流れないように排水対策を行うと共に底部の強化処理と固定処理を行う必要がある。また、石材表面の処理は、シラン樹脂を用いて行う。周辺の木については、根が次第に大きくなって板石下部の地盤を緩める可能性が指摘されるため、木の伐採を行ったほうが良いと考えられる。

漢字碑文 (SH02)

表層剥離については、剥離しないようにエポキシ樹脂を注入して接着を図る必要がある。また、石材表面の処理はシラン樹脂を用いて行う。

3. エルデネ・オール遺跡

調査方針

- ・岩石の実測図作成、銘文の解読調査などの実施
- ・現状記録のためにレプリカ作製
- ・岩石の同定、劣化状態、析出している塩類の同定などの保存状態の調査
- ・クリーニング処置が必要

雨水の流れるところは、銘文の上に庇などをつけて流れを他に誘導する処置が必要である。庇は、エポキシ樹脂を使用して作成すればよい。鳥の糞については、水でクリーニングする。鳥が巣を作らないように対策を取る必要がある。

(青木繁夫、邊牟木尚美)

V. 整備活用計画の方針

1. アラシャーン・ハダ遺跡

整備活用計画を策定するにあたっての方針としては、以下のようなことが考えられる。現地では観光資源として活用しようとしているため、駐車場、見学通路、案内板などのガイダンス施設等の統合的な遺跡管理計画を作成する必要がある。

調査・記録

考古学調査

- ・アラシャーン・ハダ及び周辺地域の考古学調査（分布調査、記録作業）
特に、岩絵、旧石器・新石器遺跡、墓域、契丹時代の山城
（衛星写真・地下探査・GIS データベースの作成、高精細写真・拓本等、必要に応じて試掘調査）

民族学調査

- ・移動民（遊牧民）の移動経路、夏営地・秋営地・春営地・冬営地の位置
- ・部族ごとの営地の使い分けの有無
- ・ゲルの設置する際の立地
- ・森林地帯の移動民と草原地帯の移動民の関係（共存・対立）

歴史学調査

- ・銘文の詳細な記録作成
- ・銘文の解説（世界遺産に登録する上での価値付けに極めて重要）

その他

- ・古環境の復元（特に森林の範囲）

整備・活用

- ・周辺地域に点在する遺跡を効率よく見学できるルートの設定
- ・案内板・案内図・道路標識の設置
- ・アラシャーン・ハダのロゴ、シンボルマークの決定
- ・現地で確認したルートの設定
- ・個々の岩画等の案内板・説明板（材料については検討必要）
- ・アクセス路の設置（自然石・焼成レンガ等の利用）
- ・過去の発掘調査区のクリーニング（埋め戻し等を検討）
特に「タムガのある石盤 (RH03)」部分については、立てるか、どこまで、何で埋め戻すか、過去の写真記録を参照して方針を検討。
- ・柵の設置（範囲をどこまでにするか、検討必要。車の乗り入れを規制）
- ・駐車場の設置
- ・管理所（ログハウス）やツーリストキャンプの設置
- ・案内板、アクセス路、柵、駐車場、管理所の設置については景観への配慮が重要

2. セルベン・ハールガ遺跡

調査・記録

考古学調査

- ・セルベン・ハールガ及び周辺地域の考古学調査（分布調査、記録作業）
特に、岩絵、墓域等の遺跡の有無
（衛星写真・地下探査・GIS データベースの作成、高精細写真・拓本等、必要に応じて試掘調査）

民族学調査

- ・移動民（遊牧民）の移動経路、夏営地・秋営地・春営地・冬営地の位置
- ・ゲルの設置する際の立地
- ・水資源の確認

歴史学調査

- ・銘文の詳細な記録作成
- ・銘文の解読

整備・活用

- ・調査の結果、遺跡が確認された場合については、周辺地域に点在する遺跡を効率よく見学できるルートの設定
- ・案内板・案内図・道路標識の設置
- ・セルベン・ハールガのロゴ、シンボルマークの決定
- ・案内板・説明板（材料については検討必要、山の麓に設置）
- ・アクセス路の設置（自然石・焼成レンガ等の利用）
- ・柵や駐車場の設置（現時点では不要か？）
- ・案内板・アクセス路・柵・駐車場の設置については景観への配慮が重要

(山内和也)

VI. まとめ

1. まとめ

ヘンティ県所在のアラシャーン・ハダ遺跡とセルベン・ハールガ遺跡は、共にモンゴルの長きにわたる歴史を雄弁に物語る貴重な遺産である。これらのすばらしい遺産を、確実に後世に伝えていくためにも、遺産の適切な保存管理計画が必要である。

しかしながら、このように重要な遺産であるにもかかわらず、これらの遺産に関する位置情報を含めた正確な記録はこれまで作成されておらず、ようやく今回の調査でその概要を掴むことができた。今後、これらの遺産の価値を評価し、適正な保存管理計画を立案するためには、記録の作成が必須であり、最優先で取り組まなければいけない課題である。また、銘文については、その内容を解読することが、これらの遺産の価値を正確に知る上で不可欠であり、記録作成とあわせて喫緊に取り組むべき課題だといえる。これらの記録作業ならびに銘文解読による価値評価作業が行われた上で、適切な保存修復方針や、活用方針を立てる必要がある。

アラシャーン・ハダ遺跡は、大岩一帯のみならず、周辺の広い範囲にわたって様々な時代にまたがる遺産が分布しており、この地域全体の価値を把握するためには、広域の調査が必要であろう。また、様々な銘文については、一刻も早い解読作業が待たれる。そのためにも、銘文の判読を困難にしている析出物の除去などの措置が必要である。

一方で、セルベン・ハールガ遺跡は、不安定な状態で存在する花崗岩に陰刻された遺跡であり、崩壊のおそれがあるほか、花崗岩特有の劣化により、銘文そのものの存続が危ぶまれる。一刻も早く記録を作成し、何らかの保存処置を施す必要がある。

なお、今回の調査では、アラシャーン・ハダ遺跡とセルベン・ハールガ遺跡の途中に位置するエルデネ・オール遺跡の調査も行った。このように、ヘンティ県一帯には、未知の遺産が眠っている可能性が多分にある。アラシャーン・ハダ遺跡やセルベン・ハールガ遺跡の保全に取り組むと同時に、再度、広域での遺産分布調査も行うことが望ましい。

このような遺跡の記録や地図の作成と、学術調査、そしてこれらの情報を元にした遺産の価値に基づく保存管理計画の立案は、文化遺産保全に携わる専門家がリーダーシップをとり、一貫して作業を進める必要がある。遺跡の記録作業や銘文判読作業とあわせて、このような遺跡の修復および整備作業にあたることのできる専門家の養成も忘れてはならない重要な課題といえるであろう。このことは、単にモンゴル国だけの課題ではなく、日本においても検討すべき重要課題である。すなわち、今後、同様な遺産について、トータルで作業にあたれるような人材の育成が、モンゴル・日本両国共通の重要な課題であると考えられる。

上記にあげたような課題点をもとにモンゴル・日本の専門家が十分な議論を行い、今後の文化遺産保全に向けた行動計画をとりまとめるべきである。

最後に、当調査に全面的に協力してくださった、教育・文化・科学省文化芸術局ならびに、国立文化遺産センターに厚く感謝の意を述べる。また、調査を円滑に進めるために協力してくださったモンゴル民族歴史博物館館長サロールプヤン氏、通訳を快くお引き受けくださったモンゴル国立大学日本語学部教授のムンフツェツェグ氏にも大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表す。

2. 文献目録

セルベン・ハールガ遺跡

- 愛新覺羅烏拉熙春 2006a : Aisin Gioro Ulhicun, The Stone-Carved Jurchen Inscriptions on the Nine Peaks Cliff of Mongolia. (白石編)『モンゴル国所在の金代碑文遺跡の研究(科研報告書)』 pp.8-19
- 愛新覺羅烏拉熙春 2006b 「蒙古九峰石壁石刻と「札兀揚・忽里」『立命館文学』595、pp.40-59
- 加藤晋平 1992 「モンゴル人民共和国ヘンティ県バヤンホトクの碑文について」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第1集、pp.128-138
- 松田孝一 2006 「セルベン・ハールガ漢字銘文とオルジャ河の戦い」(白石編)『モンゴル国所在の金代碑文遺跡の研究(科研報告書)』 pp.28-50
- 白石典之 2001 『チンギス=カンの考古学』同成社
- 白石典之 2006a 『チンギス・カン～蒼き狼の実像～』中央公論新社
- 白石典之 2006b : Shiraiishi, N., Archaeological and Historical Researches of Serven Khaalga Inscriptions. (白石編)『モンゴル国所在の金代碑文遺跡の研究(科研報告書)』 pp.1-7

アラシャーン・ハダ遺跡、エルデネ・オール遺跡

- 松川節 2008: 「モンゴル国における契丹文字資料と研究状況(1)」荒川慎太郎・高井康典行・渡部健哉(編)『遼金西夏研究の現在(1)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.101-112, -5 pls.
- ПэрлээХ. 1976. Монголг ̄мнийгарлыгтамгаархайжсудлахньУлаанбаатар.
- ПэрлээХ. 1979: “Киданчуудынбичгийндурсгалмонголоосолдсоннь” Хэлзохиолсудлал13:3, pp.15-30, -7 pls.
- 白石典之 2008: 「ヘルレン河流域における遼(契丹)時代の城郭遺跡」荒川慎太郎・高井康典行・渡部健哉(編)『遼金西夏研究の現在(1)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.1-21.

文化遺産国際協力コンソーシアム 協力相手国調査(モンゴル)
「ヘンティ県遺跡状況調査」報告書

発行日 平成 21 (2009) 年 3 月 31 日

発 行 文化遺産国際協力コンソーシアム

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43

Tel. 03-3823-4841